

(データ) 大学生の学びと成長をパーソナリティ特性から見る (その2)

要約

本レポートでは、前レポート (その1) の知見を踏まえて、大学生の以下のような P タイプの特徴を見出した。

- ・ 社会人をパーソナリティ特性から検討したレポート (その1) の知見の一つは、勤勉性・外向性・経験への開かれがすべて高い P タイプ 1 が職場適応や能力の得点が最も高く、勤勉性・外向性・経験への開かれがすべて低い P タイプ 5 がそれらの得点が最も低いことであった。他方で、勤勉性が低いものの外向性・経験への開かれが高い P タイプ 2 が、勤勉性・外向性・経験への開かれがすべて高い P タイプ 1 と近い特徴を示していた。大学生調査からも、主体的な学習態度、二つのライフを除き、これとほぼ同様の特徴が認められた。
- ・ レポート (その1) では、P タイプ 2 は適応や成長を促す P タイプであると考えられたが、大学生では P タイプ 2 は勤勉性が低く、学びと成長にブレーキがかかるようである。主体的な学習態度との関連も弱い結果が示されている。ただし、AL 外化との関連では社会人調査の知見と同様の特徴を示しており、AL 外化は仕事・社会へのトランジションに多かれ少なかれ繋がる学習法であると言える。
- ・ 勤勉性が高いものの外向性・経験への開かれが低い P タイプ 4 は、レポート (その1) と同様に、3 つすべてが低い P タイプ 5 と近い特徴を示していた。社会人、大学生を問わず、勤勉性が高いだけでは学びと成長、職場適応を促しにくいと言える。

第1節 問題

学校から仕事・社会へのトランジション研究において、パーソナリティ研究におけるビッグファイブ論から「勤勉性」「外向性」「経験への開かれ」の3つのパーソナリティ特性を取り出し、とりわけ外向性・経験への開かれの「拡張的パーソナリティ」の有効性を検討している。パーソナリティ特性はさまざまな研究で用いられているテーマ横断的な心理変数であり、現代社会に適応し、学び成長する人の特性を学校・仕事・社会を跨がって、さらには青年期・成人期・中年期・老年期を跨がって検討するのに有用であると考えられる。

レポート (その1) (注1) では、ビッグファイブ論の理論的背景、勤勉性・外向性・経験への開かれの3つのパーソナリティ特性が学校教育で育てる学習態度や能力、仕事・社会で求められる職場適応や能力とどのように対応するかを理論的に整理した。その上でビジネスパーソンを対象に調査を行い、「勤勉性」「外向性」「経験への開かれ」の得点から5つの P タイプ (パーソナリティタイプ) を抽出した。

P タイプ 1 は3つのパーソナリティ得点がすべて高いタイプ、P タイプ 3 はすべて中程度のタイプ、P タイプ 5 はすべて低いタイプである。他方で、P タイプ 2 は勤勉性の得点は低い、外向性、経験への開かれの得点は高いタイプであり、P タイプ 4 は勤勉性の得点は高い、外向性、経験への開かれの得点は低いタイプである。これらの P タイプと職場適応、能力等との関連を検討した結果、P タイプ 1 が最も適応的・成長的であり、P タイプ 5 が最も不適応的であった。パーソナリティ特性から社会人の職場適応や能力等を検討していく有効性が示された。

他方で、勤勉性は低いものの外向性・経験への開かれの高い P タイプ 2 は、これら3つの得点

(データ) 大学生の学びと成長をパーソナリティ特性から見る (その2) (2021年1月7日掲載 更新なし)

がすべて高い P タイプ 1 と職場適応、能力等の観点から近い特徴を示していた。そして、勤勉性は高いものの外向性・経験への開かれが低い P タイプ 4 は、これら 3 つの得点がすべて低い P タイプ 5 と職場適応、能力等の観点から近い特徴を示していた。これらの結果から、トランジション実践においては、学校教育での習得的な学習の基礎となる勤勉性だけでなく、アクティブラーニングや探究的な学習による外向性や経験への開かれを育てることが必要であろうと考えられた。

本レポートは、現代社会に適応し、学び成長する人の特徴をパーソナリティ特性から検討する「その2」の研究である。大学生サンプルを収集して、レポート (その1) で示された知見が大学生にも適用できるかを検討することを目的とする。

(注1) 「(データ) パーソナリティ特性からみるビジネスパーソンの職場適応や能力 (その1)」を参照。
[http://smizok.net/education/subpages/a00034\(personality5\).html](http://smizok.net/education/subpages/a00034(personality5).html)

第2節 調査方法とサンプル等について

調査は、インターネットリサーチ会社 (株式会社マクロミル) に依頼して、2019年8月に実施された。大学生3・4年生を対象に、『平成30年度学校基本調査』から大学生の男女比率をそれぞれ54.9%、45.1%として条件とし、計2,062人の大学生が調査に参加した。同一回答を重ねるなど不適切な回答を67名分除外して、計1,995人 (男性1,077人、女性918人) を分析対象とした。平均年齢は21.62歳 ($S.D.=1.86$) であった。

以下の分析における効果量の解釈は、Cohen 指標他を参考にして整理された水本・竹内 (2008) の示す大きさの目安を参考に行っている。本レポートでは、一要因分散分析における η^2 について小 (.01)、中 (.06)、大 (.14) を、 χ^2 検定における *Cramer's V* について小 (.10)、中 (.30)、大 (.50) を用いるものとする。

第3節 結果と考察

(1) 潜在プロフィール分析 (LPA) の手続きと結果

レポート (その1) (注1) と同様に、「勤勉性」「外向性」「経験への開かれ」の3つのパーソナリティ特性の得点 (項目や得点化については資料①を参照のこと) を用いて、潜在プロフィール分析 (LPA: latent profile approach) を行った。分析ソフト (*MPlus version 7.4*)、モデル決定の基準 (*AIC*、*BIC/ABIC*、*Entropy*、*VLMR*、*BLRT*) はレポート (その1) と同様である。

図表1に示すように、2～7プロフィールのモデル評価を検討した。*BIC*からは6のプロフィールが、*VLMR*からは4のプロフィールがモデルとして適切であることが示されている。エントロピーは.800以上で高い分類の正確性を示すとされるが、最も高いエントロピーの値を示したのは5のプロフィールであった (.765)。Nylund, et al. (2007) は *BLRT* の推定結果が最も正確であると論じているが、本分析では *BLRT* は2～10プロフィールのすべてのモデルで有意差を示しており、*BLRT* の指標は本データでは有効ではないと判断された。以上の結果を踏まえて、4～6のプロフィールの特徴を検討し、内容の適切さと簡潔性から最終的にレポート (その1) (注1) と同様の5プロフィールのモデルを採択することとした。

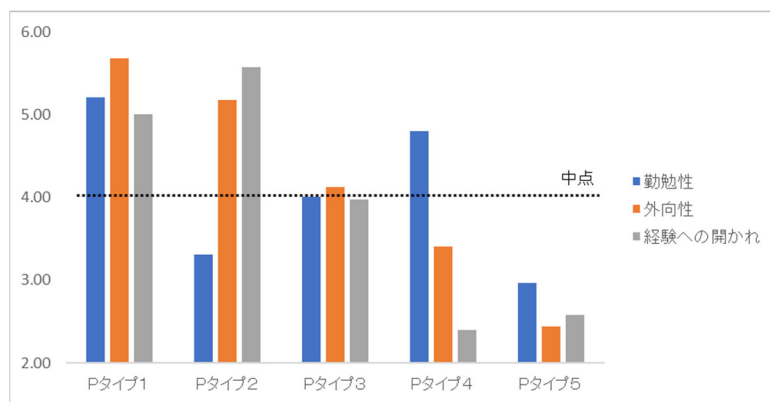
プロフィールを「Pタイプ (パーソナリティタイプ)」と表現し直し、それぞれのPタイプの

(データ) 大学生の学びと成長をパーソナリティ特性から見る (その2) (2021年1月7日掲載 更新なし)

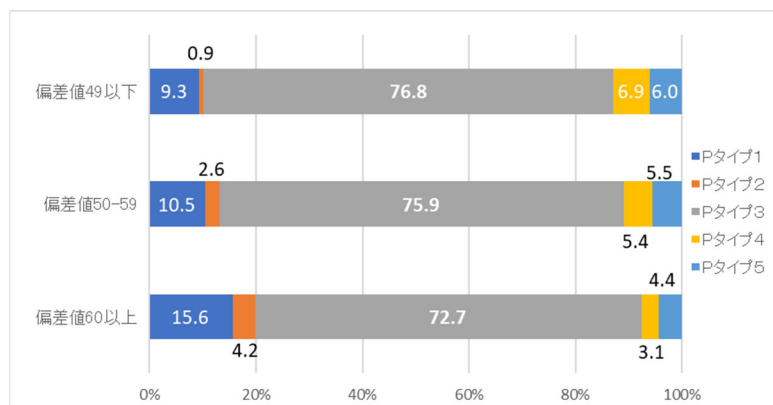
特徴を図表2に示す。特徴はレポート(その1) (注1) とほぼ同様である。最も多く見られたのがPタイプ3 (77.2%) であったのも、レポート(その1)と同様の結果である。

図表1 モデル評価

プロフィール数	AIC	BIC	ABIC	VLMR <i>p</i> -value	BLRT <i>p</i> -value	Entropy
2	15366.224	15422.208	15390.438	<.001	<.001	.650
3	15086.614	15164.991	15120.512	<.001	<.001	.762
4	15025.904	15126.675	15069.488	<.05	<.001	.700
5	14984.322	15107.487	15037.592	.242	<.001	.765
6	14959.821	15105.379	15022.776	<.05	<.001	.727
7	14939.335	15107.287	15011.975	.092	<.001	.758



図表2 パーソナリティ特性を用いた5つのPタイプ



図表3 Pタイプと偏差値との関連
* $\chi^2(8)=31.983, p<.001$ Cramer's *V*=.09 (効果量無し)

	Pタイプ1	Pタイプ2	Pタイプ3	Pタイプ4	Pタイプ5	計
偏差値60以上	71(15.6)	19(4.2)	330(72.7)	14(3.1)	20(4.4)	454(100.0)
偏差値50-59	80(10.5)	20(2.6)	576(75.9)	41(5.4)	42(5.5)	759(100.0)
偏差値49以下	62(9.3)	6(0.9)	511(76.8)	46(6.9)	40(6.0)	665(100.0)
計	213(11.3)	45(2.4)	1,417(75.5)	101(5.4)	102(5.4)	1,878(100.0)

図表3は大学の偏差値との関連を示したものである。大学(学部)の偏差値は、河合塾の入試難易ランキング表 (<http://www.keinet.ne.jp/rank/>) より求めている。判定の難しい大学や学部

(データ) 大学生の学びと成長をパーソナリティ特性から見る(その2)(2021年1月7日掲載 更新なし)

でも、できるだけ近い偏差値帯に分類するようにし、それ以外のものは判定不能として欠損値とした。割合だけ見れば、Pタイプ1、2は偏差値60以上の大学出身者にやや多く、Pタイプ4、5は偏差値49以下の大学出身者にやや多く見える。しかしながら、統計的には有意差は見られるものの効果量は無く($\chi^2(8)=31.983, p<.001$ Cramer's $V=.09$)、実質的に大きな差ではないと言える。

(2) 主体的な学習態度、AL外化、資質・能力との関連

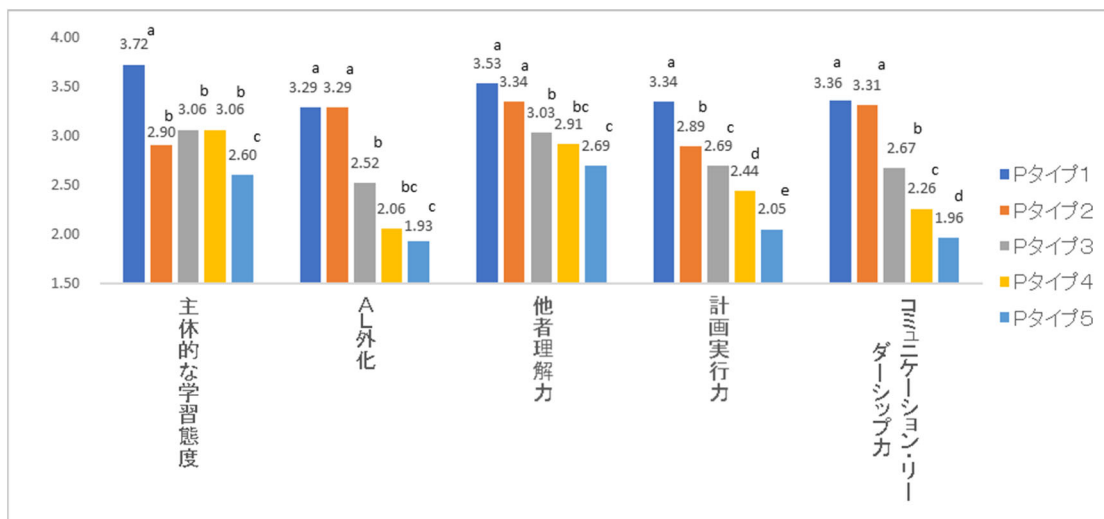
図表4に、Pタイプと主体的な学習態度、AL外化、資質・能力(注2)(尺度や項目の説明、得点化については資料①を参照のこと)との関連を示す。一要因分散分析の結果、いずれもタイプ間で0.1%水準の有意差が見られた。効果量(η^2)も中から大と大きく、タイプ間の差が十分認められるという結果であった。

多重比較を行うため、タイプ間の得点差をTukey法で検討した結果、主体的な学習態度との関連を除き、おおむね先の社会人調査(注1)と近い結果が見出された。すなわち、Pタイプ1、2あるいはPタイプ1の得点が最も高く(a)、Pタイプ5の得点が最も低い(c~e)という結果であった(注3)。他のタイプはこれらの中間にあった。勤勉性が低いものの外向性・経験への開かれの得点が高いPタイプ2は、全体的にPタイプ1に並んで得点が高く、勤勉性のみが高いPタイプ4は比較的Pタイプ5に近い得点を示していた。

なお、先の社会人調査の結果と異なっていた主体的な学習態度との関連については、第4節で次項(3)の二つのライフとの関連も踏まえて、総合的に考察を行うこととする。

(注2) 溝上(2015)で用いられた資質・能力は「他者理解力」「計画実行力」「コミュニケーション・リーダーシップ力」「社会文化探究心」の4つの下位次元から成るが(資料①を参照)、本データでは「社会文化探究心」の α 係数が低かったため(.484)、分析からは除外している。

(注3) タイプ間の差の検定でaのみ、bのみと記載されれば、aはbよりも有意に得点が高い(低い)ことを表している。abというのは、aとbに有意な差が認められず、跨がっていることを表している。



(データ) 大学生の学びと成長をパーソナリティ特性から見る (その2) (2021年1月7日掲載 更新なし)

変数	得点レンジ	全体	Pタイプ1	Pタイプ2	Pタイプ3	Pタイプ4	Pタイプ5	一要因分散分析	効果量 (η^2)
		N=2,062	N=230	N=47	N=1,562	N=111	N=112		
主体的な学習態度	1-5	3.10(0.77)	3.72(0.81)	2.90(0.98)	3.06(0.70)	3.06(0.76)	2.60(0.85)	$F(4,2057)=56.037, p<.001$.10(中)
AL外化	1-4	2.57(0.75)	3.29(0.65)	3.29(0.68)	2.52(0.67)	2.06(0.70)	1.93(0.76)	$F(4,2057)=120.789, p<.001$.24(大)
他者理解力	1-4	3.07(0.66)	3.53(0.50)	3.34(0.65)	3.03(0.64)	2.91(0.74)	2.69(0.71)	$F(4,2057)=44.439, p<.001$.08(中)
計画実行力	1-4	2.72(0.58)	3.34(0.46)	2.89(0.63)	2.69(0.51)	2.44(0.61)	2.05(0.56)	$F(4,2057)=137.239, p<.001$.21(大)
コミュニケーション・リーダーシップ力	1-4	2.70(0.61)	3.36(0.49)	3.31(0.45)	2.67(0.53)	2.26(0.52)	1.96(0.56)	$F(4,2057)=181.533, p<.001$.26(大)

図表4 Pタイプと主体的な学習態度、AL外化、資質・能力との関連

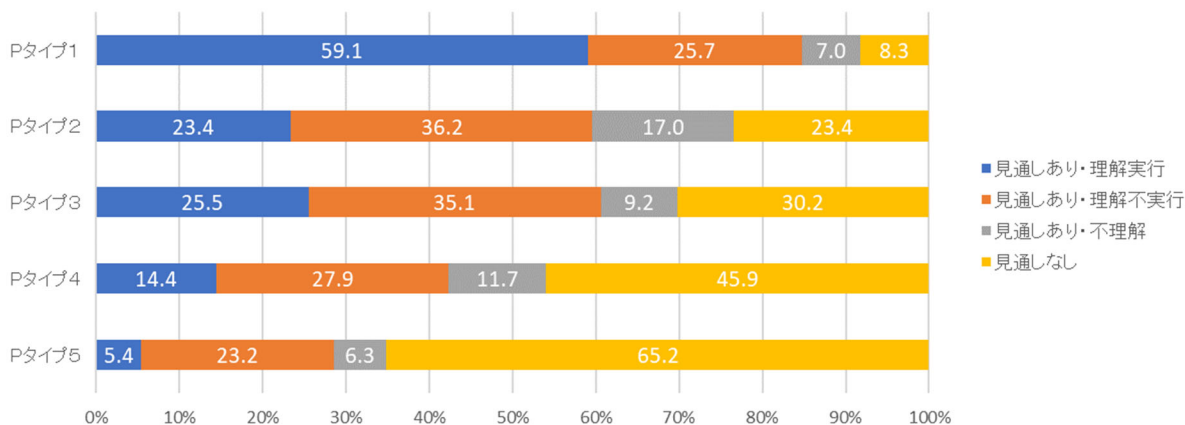
(3) 二つのライフとの関連

Pタイプと二つのライフ (項目の説明、得点化については資料①を参照のこと) との関連について χ^2 検定を行った結果、0.1%水準の有意差が見られた ($\chi^2(12)=220.850, p<.001$ 、効果量小: *Cramer's V*=.19)。表には、残差分析の結果で有意 ($p<.05$) に多いセルに▲、少ないセルに▽を記している (図表5を参照)。

図表から大きく3つの結果が見て取れる。1つは、Pタイプ1に見通しあり・理解実行が多いことである (59.1%)。二つのライフ (見通しあり・理解実行) は、大学生の学びと成長を促す基盤変数と考えられていることから (溝上, 2018)、この結果は勤勉性・外向性・経験への開かれのパーソナリティ特性を併せ持つことが、二つのライフの実現と関連することを示唆している。しかも、59.1%と高い割合なので、Pタイプ1の二つのライフの実現の程度は相当高いと考えられる。

2つ目に、統計的にはクリアな差が示されていないが、割合の上ではPタイプ2はPタイプ3に類似した特徴を示していることである。外向性・経験への開かれの得点が高くて、勤勉性の得点が高いPタイプ2は、大学生の学びと成長を促す基盤変数としての二つのライフを実現するにはやや弱いようである。

3つ目に、Pタイプ5、4に見通しなしが多いことである (順に65.2%、45.9%)。Pタイプ4は、外向性・経験への開かれの得点が高いながらも勤勉性の得点は高いPタイプであるが、勤勉性が高いだけでは、二つのライフの実現は難しく、結果すべての得点が高いPタイプ5と近いPタイプとなることを示唆している。しかも、いずれのPタイプにも65.2%、45.9%と高い割合で見通しなしが存在することから、Pタイプ5、4の二つのライフの実現の程度は相当低いと考えられる。



(データ) 大学生の学びと成長をパーソナリティ特性から見る (その2) (2021年1月7日掲載 更新なし)

	見通しあり・理解実行	見通しあり・理解不実行	見通しあり・不理解	見通しなし	計
Pタイプ1	136(59.1)▲	59(25.7)▽	16(7.0)	19(8.3)▽	230(11.2)
Pタイプ2	11(23.4)	17(36.2)	8(17.0)▲	11(23.4)	47(2.3)
Pタイプ3	398(25.5)▽	548(35.1)▲	144(9.2)	472(30.2)	1,562(75.8)
Pタイプ4	16(14.4)▽	31(27.9)	13(11.7)	51(45.9)▲	111(5.4)
Pタイプ5	6(5.4)▽	26(23.2)▽	7(6.3)	73(65.2)▲	112(5.4)
計	567(27.5)	681(33.0)	188(9.1)	626(30.4)	2,062(100.0)

* $\chi^2(12)=220.850, p<.001, Cramer's V=.19$ (効果量小)。残差分析の結果、有意 ($p<.05$) に多いセルに▲、少ないセルに▽を記す。

図表5 Pタイプと二つのライフとの関連

第4節 これまでの知見を踏まえた総合的考察

レポート (その1) (注1) の知見を踏まえて、大学生のPタイプの特徴をまとめよう。

- ・ 社会人をパーソナリティ特性から検討したレポート (その1) の知見の一つは、勤勉性・外向性・経験への開かれがすべて高いPタイプ1が職場適応や能力の得点が最も高く、勤勉性・外向性・経験への開かれがすべて低いPタイプ5がそれらの得点が最も低いことであった。他方で、勤勉性が低いものの外向性・経験への開かれが高いPタイプ2が、勤勉性・外向性・経験への開かれがすべて高いPタイプ1と近い特徴を示していた。大学生調査からも、主体的な学習態度、二つのライフを除き、これとほぼ同様の特徴が認められた。
- ・ これまでの研究成果 (溝上, 2018) から、二つのライフが大学生の学びと成長の基盤変数となることが明らかとされてきた。この二つのライフとの関連においては、Pタイプ2は勤勉性・外向性・経験への開かれがすべて中程度のPタイプ3と近い特徴を示していた。レポート (その1) では、Pタイプ2は適応や成長を促すPタイプであると考えられたが、大学生の学びと成長を促すには勤勉性の低さが問題となり、学びと成長にブレーキがかかるようである。おそらく、このせいで主体的な学習態度との関連も弱い結果が示されているのだと考えられる。ただし、AL外化との関連では社会人調査の知見と同様の特徴を示していたことから、同じ学習変数ではあっても、AL外化は仕事・社会へのトランジションに多かれ少なかれ繋がる学習法であると言える。
- ・ 勤勉性が高いものの外向性・経験への開かれが低いPタイプ4は、社会人調査と同様に、3つすべてが低いPタイプ5と近い特徴を示していた。社会人、大学生を問わず、勤勉性が高いだけでは学びと成長、職場適応を促しにくいと言える。

文献

- 溝上慎一 (責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾 (編) (2015). どんな高校生が大学、社会で成長するのかー「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプー 学事出版
- 溝上慎一 (責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾 (編) (2018). 高大接続の本質ー「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題ー 学事出版
- 水本篤・竹内理 (2008). 研究論文における効果量の報告のためにー基礎的概念と注意点ー 英語

(データ) 大学生の学びと成長をパーソナリティ特性から見る (その2) (2021年1月7日掲載 更新なし)

教育研究, 31, 57-66.

Nylund, K. L., Asparouhov, T., & Muthén, B. O. (2007). Deciding on the number of classes in latent class analysis and growth mixture modeling: A Monte Carlo simulation study. *Structural Equation Modeling, 14*(4), 535-569.

謝辞

本レポートは、公益財団法人電通育英会の研究支援助成を受けて行われたものです。長年にごわたくしに支援して下さる電通育英会の皆さまに心よりのお礼を申し上げます。

(データ) 大学生の学びと成長をパーソナリティ特性から見る (その2) (2021年1月7日掲載 更新なし)

資料①：調査票 (本レポートの該当項目のみ)

● (尺度) Big Five 尺度

【説明】 パーソナリティ特性論 (パーソナリティが複数の特性 [次元] から記述されるという立場からのアプローチ) の研究の発達に伴って、パーソナリティは大きく5つの特性で説明できると考えられるようになっていく。本レポートでは、和田 (1996) の「外向性」「情緒不安定性」「誠実性」「調和性」「開放性」の5因子から成る Big Five 尺度の中から、「誠実性」「外向性」「開放性」の3因子を使用している。因子名は、「勤勉性」「外向性」「経験への開かれ」と命名し直している (以上、詳しくはレポート (その1) (注1) の第1節を参照)。

【教示文・項目】

「以下のことがあなた自身にどのくらいあてはまるかについて、最も近い番号を選んでください。」

- | | |
|------------------|---------------------|
| (1) 話し好き | (19) 無頓着な |
| (2) 独創的な | (20) 頭の回転の速い |
| (3) いい加減な | (21) 軽率な |
| (4) 無口な | (22) 人嫌い |
| (5) 多才の | (23) 臨機応変な |
| (6) ルーズな | (24) 勤勉な |
| (7) 陽気な | (25) 活動的な |
| (8) 進歩的 | (26) 興味の広い |
| (9) 怠惰な | (27) 無節操 |
| (10) 外向的 | (28) 意思表示しない |
| (11) 洞察力のある | (29) 好奇心が強い |
| (12) 成り行きまかせ | (30) 几帳面 (きちょうめん) な |
| (13) 暗い | (31) 積極的な |
| (14) 想像力に富んだ | (32) 独立した |
| (15) 不精 (ぶしょう) な | (33) あきつぽい |
| (16) 無愛想な | (34) 地味な |
| (17) 美的感覚の鋭い | (35) のみこみのはやい |
| (18) 計画性のある | (36) 温和な |

- ①まったくあてはまらない ②あまりあてはまらない ③少しあてはまらない ④どちらともいえない
⑤少しあてはまる ⑥まあまああてはまる ⑦非常にあてはまる

【得点化】 赤字の逆転項目を反転させて、加算平均 (合計して項目数で除する) を行う。

- ・ 勤勉性 (12項目) : 3, 6, 9, 12, 15, 18, 21, 24, 27, 30, 33, 36 ($\alpha=.764$)
- ・ 外向性 (12項目) : 1, 4, 7, 10, 13, 16, 19, 22, 25, 28, 31, 34 ($\alpha=.878$)
- ・ 経験への開かれ (12項目) : 2, 5, 8, 11, 14, 17, 20, 23, 26, 29, 32, 35 ($\alpha=.828$)

【出典】 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67 (1), 61-67.

●主体的な学習態度

【説明】 畑野・溝上 (2013) で開発した「主体的な授業態度」尺度を、畑野 (2013) にならって、「主体的な学

(データ) 大学生の学びと成長をパーソナリティ特性から見る (その2) (2021年1月7日掲載 更新なし)

習態度」尺度と名称を変えて使用している。

【教示文・項目】

「以下のそれぞれの項目内容は、あなたにどの程度あてはまりますか。もっとも近いものを1つ選んでください。」(5件法)

*授業や場合によって変わるかもしれませんが、「一般的にこの程度」という感覚でお答えください。

*課題、プレゼンテーション、レポートの経験がない方は、「出されたらどのように取り組むか」ということを想定してお答えください。

- (1) レポートや課題はただ提出すればいいという気分で仕上げることが多い
- (2) レポートは満足がいくように仕上げる
- (3) 授業には意欲的に取り組む
- (4) 課題には最小限の努力で取り組む
- (5) 単位さえもらえればよいという気持ちで授業に出る
- (6) 課題は納得いくまで取り組む
- (7) 課されたレポートや課題を少しでも良いものに仕上げようと努力する
- (8) 授業はただぼうっと聞いている
- (9) プレゼンテーションの際、何を質問されても大丈夫なように十分に調べる

【得点化】 赤字の逆転項目を反転させて、加算平均(合計して項目数で除する)を行う。(α=.845)

【出典】

畑野快 (2013). 大学生の内発的動機づけが自己調整学習方略を媒介して主体的な学習態度に及ぼす影響 日本教育工学会論文誌, 37(Suppl.), 81-84.

畑野快・溝上慎一 (2013). 大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討 日本教育工学会論文誌, 37 (1), 13-21.

● **アクティブラーニング外化 (AL 外化)**

【説明】 溝上他 (2016) で開発された、アクティブラーニングの「外化」という行動から、学習が「気づき」「内化」を経て理解として深まるプロセスまでを含み込んだ尺度である。AL 外化は全体で 13 項目の尺度であるが、そのうち以下に示す 3 項目が Bifactor モデルのグループ因子として抽出されている。全体の 13 項目とも高い相関を示す因子である。詳しい尺度開発の説明は、溝上他 (2016) を参照のこと。

【教示文・項目】

「大学(短大・専門学校)で、話し合いや発表のある授業に対して、以下の項目のような態度をどの程度とっていましたか。それぞれの項目について、もっとも近い選択肢を1つ選んでください。」(4件法)

*そういう授業が全くなかった人は、「あてはまらない」を選んでください。

- (1) 議論や発表の中で自分の考えをはっきりと示す
- (2) 根拠を持ってクラスメイトに自分の意見を言う
- (3) クラスメイトに自分の考えをうまく伝えられる方法を考える

【得点化】 換算平均(合計して項目数で除する)を行う。(α=.810)

【出典】 溝上慎一・森朋子・紺田広明・河井亨・三保紀裕・本田周二・山田嘉徳 (2016). Bifactor モデルによるアクティブラーニング(外化)尺度の開発 京都大学高等教育研究, 22, 151-162.

●資質・能力

【説明】溝上(2015)で用いた高校生向けの自己評定式の資質・能力18項目を、大学生、社会人にも適用して用いている。因子分析の結果をふまえて、「他者理解力」「計画実行力」「コミュニケーション・リーダーシップ力」「社会文化探究心」の4因子の得点を加算平均して用いている。

(注)文中で述べるように、本データでは「社会文化探究心」の α 係数が低かったため(.484)、分析からは除外している。

【教示文・項目】

「最近のあなたを振り返って、下記の能力や事柄がどの程度身についたと感じますか。」

- (1) 計画や目標を立てて日々を過ごすことができる
- (2) 社会の問題に対して分析したり考えたりすることができる
- (3) リーダーシップをとることができる
- (4) 図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たりわからないことを調べたりすることができる
- (5) 他の人と議論することができる
- (6) 自分の言葉で文章を書くことができる
- (7) 人前で発表をすることができる
- (8) 他の人と協力して物事に取り組める
- (9) コンピュータやインターネットを操作することができる
- (10) 時間を有効に使うことができる
- (11) 新しいアイデアを得たり発見したりすることができる
- (12) 困難なことでもチャレンジすることができる
- (13) 人の話を聞くことができる
- (14) 自分とは異なる意見や価値を尊重することができる
- (15) 人に対して思いやりを持つことができる
- (16) 忍耐強く物事に取り組むことができる
- (17) 異文化や世界に関心を持つことができる
- (18) 自分を客観的に理解することができる

- ①まったく身につけていない ②あまり身につけていない ③まあまあ身につけている
④かなり身につけている

【得点化】それぞれの因子について、加算平均(合計して項目数で除する)を行う。なお、9, 11, 18は分析には用いていない。

- ・他者理解力(3項目): 13, 14, 15 ($\alpha=.767$)
- ・計画実行力(3項目): 1, 10, 12, 16 ($\alpha=.686$)
- ・コミュニケーション・リーダーシップ力(3項目): 3, 5, 6, 7, 8 ($\alpha=.770$)
- ・社会文化探究心(3項目): 2, 4, 17 ($\alpha=.484$)

【出典】溝上慎一(責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾(編)(2015). どんな高校生が大

学、社会で成長するのか—「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ— 学事出版

●二つのライフ

【説明】 二つのライフは、将来の見通し (future life) とその実現に向けての理解と実行 (present life) の組み合わせからなるキャリア意識である。職業や生き方といったように、将来の見通しを具体的に尋ねないにもかかわらず、「見通しあり・理解実行」の人は「見通しなし」の人に比べて、学習態度や意欲、能力の獲得など、さまざまな学びと成長の変数と正の相関関係を示す。筆者はこれまで、二つのライフを人の学びと成長の基盤変数と呼んできた (溝上 2018 を参照)。

【教示文・項目】

Q1 「あなたは、自分の将来についての見通し (将来こういう風でありたい) を持っていますか。」

- (1) 持っている
- (2) 持っていない

Q2 「あなたは、その見通しの実現に向かって、今自分が何をすべきなのか分かっていますか。またそれを実行していますか。最もあてはまるものを1つお知らせください。」

- (1) 何をすべきか分かっているし、実行もしている
- (2) 何をすべきかは分かっているが、実行はできていない
- (3) 何をすべきかはまだ分からない

【得点化】

Q1、Q2 の回答より、

- (1) 見通しあり・理解実行 (Q1 の(1)+Q2 の(1))
- (2) 見通しあり・理解不実行 (Q1 の(1)+Q2 の(2))
- (3) 見通しあり・不理解 (Q1 の(1)+Q2 の(3))
- (4) 見通しなし (Q1 の(2))

の4つのステイタスを作成する。

【出典】

溝上慎一 (責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾 (編) (2018). 高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題— 学事出版